

加古川中流域における群集墳の基礎的研究

－ 加東市上三草古墳群の紹介を中心に －

藤原 光平

1. はじめに

本稿では、加古川中流域の加東市上三草に所在する上三草古墳群の横穴式石室を紹介し、当該地域における群集墳の形成過程と石室類型からみた古墳被葬者の交流関係について検討を行う。

上三草古墳群が所在する播磨地域の横穴式石室研究に関する動向については、①黎明期における個別資料の図化の蓄積、②2000～2010年代に行われた播磨考古学研究集会や横穴式石室研究会による大規模な集成と地域編年の提示、③2010年代以降の石室形態の地域性に関する研究、といった大まかな流れでまとめられるが、研究動向全体の特徴として、大型の石室資料が集中する播磨南部地域が取り上げられる傾向が顕著な点があげられる（播磨考古学研究集会2001、横穴式石室研究会2007など）⁽¹⁾。

それに対して、播磨北部地域（加古川・市川の中・上流域）では、90年代以降、京都府立大学考古学研究室を中心に群集墳の調査及び未報告の古墳及び石室資料の図化作業が積極的に推進されてきた（中町・京都府立大学考古学研究室1999・2001、京都府立大学考古学研究室2016・2017・2018）。筆者も近年のそうした調査に携わる傍ら、当該地域における石室の地域類型を抽出しその成立及び変遷過程について検討を行う中で、播磨北部地域における横穴式石室からみた群集墳の階層構造の変遷と地域間関係については、播磨南部地域とは異なる地域類型と変遷モデルを提示してきた（藤原2017・2018・2019・2023）。

その内容について概要を述べると、播磨北部地域の主要な横穴式石室は、加西市の北条盆地周辺を起源とする玄室長が伸長する在来系の類型（有袖B類）と、河川下流域からの伝播と考える畿内系石室の要素をもつ類型（有袖A類）及び但馬地域等の日本海側の影響により採用されたと考える大型無袖石室といった外来系の類型に大きく分けられ⁽²⁾、それらの採用状況については、当初は畿内系石室の一方的な受容だけではなく在来系の類型が地域の最上位層に採用される事例も認められるが、石室の普及と階層化が進展する中で、最上位層に採用される石室類型がある程度固定化され、さらには、但馬など隣接地域からの影響を受けることでその階層構造に一部変化が及ぼされると考えた。

上記のような地域類型の変遷過程を想定してきたが、これまでの検討において紙幅の都合や資料化が進んでいなかったために紹介できなかった資料が数多く存在し、その後の図化作業を進める中で新たに得られた知見もある。そこで本稿では、当該地域において有数の規模を誇る群集墳である上三草古墳群の石室について検討し、これまで提示してきたモデルとの比較や補足を行いたい。

2. 対象資料の紹介

(1) 上三草古墳群の概要

本稿で対象とする上三草古墳群は、加古川中流域の右岸に接続する支流千鳥川をさらに遡って分岐した三草川沿いに位置する(図1)。この三草川沿岸には、古くより丹波道(京街道、現在の国道372号)と呼ばれる京都～姫路間を繋ぐ主要街道が通っており、そのため当地は隣国丹波から播磨に入る玄関口となっている。ただし、古墳群周辺は狭小な谷筋沿いに立地しており、被葬者集団の母体となる集落遺跡は現時点で発見されていない⁽³⁾。

上三草古墳群の存在が初めて認識されたのは、昭和37年度(1962～63)に実施された旧加東郡での大規模遺跡分布調査によってであり、その際に簡単な古墳分布図が作成された⁽⁴⁾。その後、昭和43年(1968)頃に上流側の丘陵地の一部が大規模な酪農場として開発され、その際に多くの古墳が消滅したそうである。ただし、その酪農場は現在も稼働しており、敷地内には破壊を免れた状態の良好な石室が多く現存している。さらに、1990年代には下流側の北山支群にて開発事業に伴う3基の石室墳(7・8・9号墳)の発掘調査が実施され、7号墳からは須恵器の特殊偏壺といった特異な遺物が出土している(加東郡教委1993)。

そして、本古墳群の横穴式石室に関しては、90年代後半から2000年代初頭頃にかけて中濱久喜氏や丹羽恵二氏らによって踏査され、播磨考古学研究集会においてその成果が報告された(中濱2002、丹羽2002)⁽⁵⁾。ただし、その内容は主要古墳の簡単な所見と年代的位置づけに留まり、詳細な測量調査や図面の公開はこれまで行われてこなかった。

以上の状況を踏まえ、筆者は今回改めて古墳群の詳細な踏査を行った上で状態の良好な石室の図化作業を実施した。その結果、まず踏査により約68基の古墳を確認し、それらを現地の立地から5つ

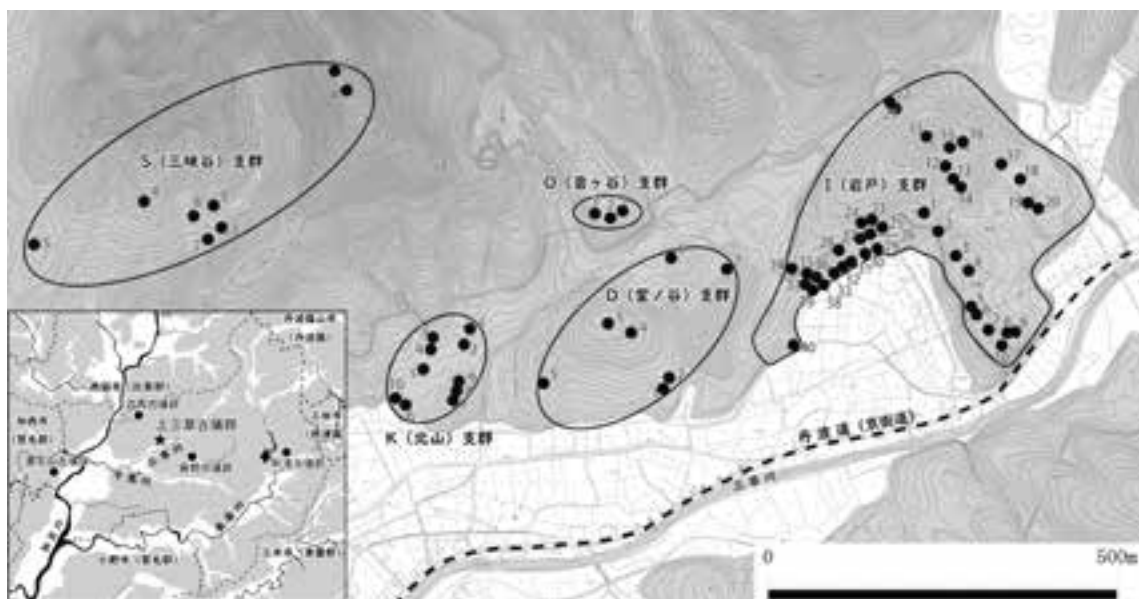


図1 上三草古墳群の位置と古墳の分布

表 1 上三草古墳群における横穴式石室の法量

支群名	古墳名	残存長	玄室				墓道				奥壁形態				玄門形態				類型						
			長さ	奥壁幅	奥壁高	玄室幅指数	床面積	天井石数	側壁石段数	残存長	墓道幅	墓道高	天井石数	側壁石段数	最下段石数	持送り	鏡石	玄門部幅		玄門部高	袖形態	袖石段数	前壁石数	袖と前壁の対応	立石
K支群	7号墳	7.70	1.80	-	1.94	6.30	-	-	4.20	1.50	-	-	-	-	2?	-	-	-	右片袖	-	-	-	-	×	有袖A類
	8号墳	7.80	1.80	-	2.00	6.48	-	-	4.20	2.40	-	-	-	-	-	-	-	-	右片袖	-	-	-	-	○	有袖A類
	9号墳	7.80	1.60	-	2.69	6.88	-	-	3.50	1.20	-	-	-	-	1	-	○	-	右片袖	-	-	-	-	-	有袖A類
D支群	1号墳	7.10	2.20	2.45	2.09	10.12	2	9~11	2.50	1.50	-	-	4~	9	2	○	×	-	左片袖	-	-	-	-	-	九州系?
	2号墳	2.00	1.00	-	-	-	3	5~6	-	-	-	-	-	4	3	○	-	-	無袖?	-	-	-	-	-	無袖?
	3号墳	7.50	1.90	2.20	2.42	8.74	4	6~9	2.50	1.30	1.30	3~	3~	4~5	1	△	○	1.80	-	右片袖	2	1	○	-	有袖A類
	4号墳	-	4.20	1.60	2.63	6.72	-	5~6	-	-	-	-	-	2~3	1	-	○	-	-	左片袖?	-	-	-	-	有袖A類
I支群	1号墳	6.85	1.80	2.60	2.14	6.93	3	8	3.00	1.50	1.90	3	5	4	1	△	○	1.80	2.50	右片袖	3	1	×	○	有袖A類
	2号墳	8.90	1.80	2.50	2.28	7.38	3	6~7	5.00	1.70	1.70	-	5	5	1	×	○	1.90	2.00	右片袖	5	1	○	△	有袖A類
	4号墳	6.60	-	1.10	-	-	5	5~	-	-	-	-	-	2	1	×	×	-	-	無袖	-	-	-	-	無袖
	14号墳	9.00	-	1.70	-	-	4	6	2.80	-	-	-	-	5	3~	○	×	-	-	無袖	-	-	-	-	大型無袖
	18号墳	3.00	2.30	1.50	1.53	3.45	3	7~	-	-	-	1~	-	6~	2	○	×	-	-	-	-	-	-	-	有袖A類
	19号墳	4.30	-	1.20	-	-	3	4~	-	-	-	-	-	4~	-	○	-	-	-	無袖?	-	-	-	-	無袖
	20号墳	4.70	3.85	2.10	2.08	7.12	3	5~7	0.85	1.20	1.5~	1~	-	7	2	○	×	1.70	1.70	右片袖	-	-	-	○	有袖A類
	23号墳	-	4.00	1.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	○	?	-	-	-	-	-	-	-	-
I支群	28号墳	4.25	-	1.30	-	-	3	7~	-	-	-	-	-	1+α	1	×	○	-	-	無袖	-	-	-	-	無袖
	34号墳	8.65	4.20	2.60	1.91	9.24	3	9	4.40	1.80	1.70	1~	4~5	6	1	○	○	2.45	2.40	右片袖	1	2	○	○	有袖A類
	38号墳	6.70	-	1.70	-	-	5	4~5	-	-	-	-	-	1+α	1	×	○	-	-	無袖	-	-	-	-	無袖

※ 1 玄室幅指数は奥壁幅 / 玄室長、玄室床面積は玄室長 × 奥壁幅でそれぞれ算出した。
 ※ 2 無袖石室の天井石数及び側壁段数については、全て玄室の欄に記載した。
 ※ 3 奥壁の持ち送り状況については、基底部から天井まで持ち送りが認められるものは○とし、上半部のみ持ち送る事例は△と記載した。
 ※ 4 古墳名に綱掛けがなされているのは、今回石室実測図を提示したものである。

の支群に分類した(図1)。なお、各支群の名称については各々が所在する地点の字名の頭文字をとり、それぞれ1から古墳番号を付与した(例：北山支群第1号墳=K-1号墳)。その上で、残存状況の良好な石室が確認できた3つの支群(K・D・I支群)を取り上げ個別資料の内容と築造時期の変遷について以下紹介していきたい。なお、各古墳の詳細な法量については表1をご参照いただきたい。

(2) 対象資料の紹介

K(北山)支群 当支群で詳細が判明しているのは、先述のとおり発掘調査が行われた7・8・9号墳である。いずれも残存長約7.7~7.8mを測り、平面プランは右片袖式の有袖A類石室に分類でき、TK209期頃の須恵器が出土している。ただし、奥壁や袖部の形状から若干の時期差が考えられ、概ね7号→8号→9号の築造順を想定できる。一方で、いずれの資料も基底部付近しか残存しておらず、これ以上詳細な構造について検討することは困難である。

D(堂ノ谷)支群 K支群の東方の丘陵地上に立地する。石室が確認できる古墳の分布をみると1・2号墳及び3・4号墳がそれぞれ近接して存在している。1号墳は玄門~羨道の詳細が不明であるものの、残存長約7.5m、玄室長約4.6m、同幅約2.2mを測り古墳群全体でも屈指の玄室規模を誇る。さらに、奥壁を9段で構成し基底部に大型の板石を採用するとともに、側壁の持ち送りと天井部付近の隅消技法が観察できる。こうした構造上の特徴から古墳群全体で最初期の石室であると評価でき、6世紀中葉~後半頃の築造と推定する。

1号墳に隣接する2号墳は、全体的に法量が小さく1号墳の従属的な位置づけになると考える。

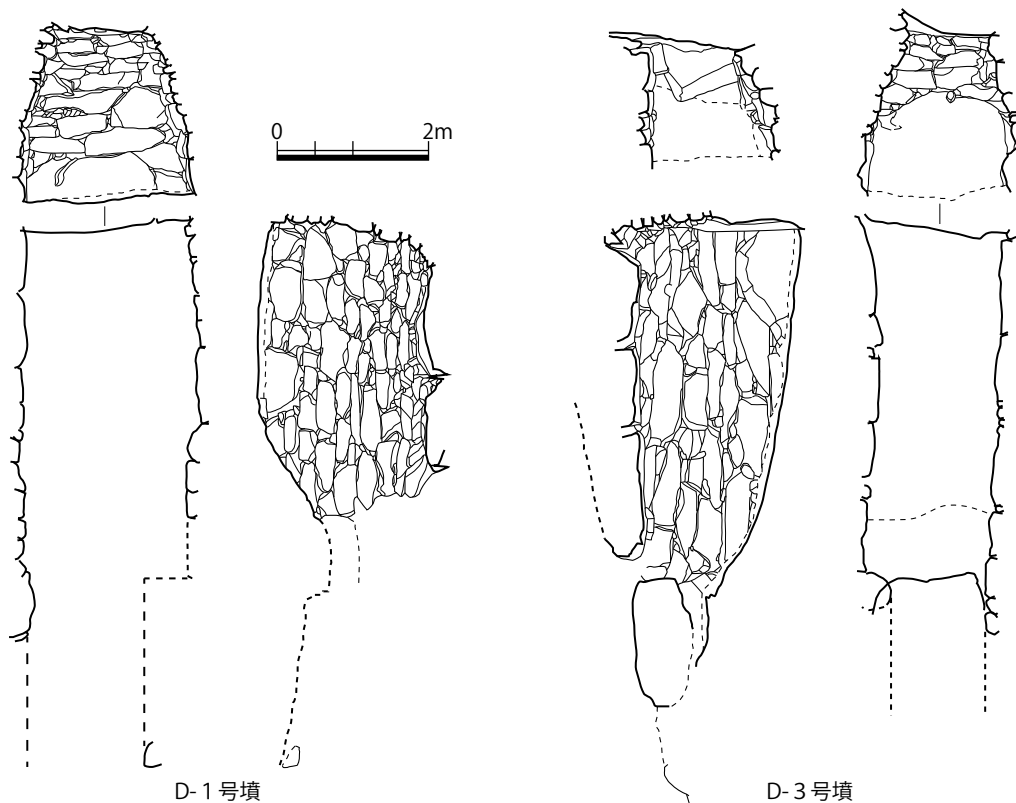


図2 上三草古墳群の横穴式石室① (S=100分の1)

奥壁基底石がやや大型化しているものの、小型の板状石材を多用するとともに、奥壁の天井部付近に隅消技法が観察できることから1号墳の系譜を引くものと想定される。

次に3号墳は、右片袖式で残存長約7.5 m、玄室長約4.6 m、同幅約1.9 mを測る。特徴としては奥壁基底部に奥壁の半分以上の高さを占める大型石材(鏡石)を使用している点であり、これは後述するI支群の大型石室にも同様の構造的特徴が認められる。また、玄門の大部分が土砂で埋没しているものの、前壁石材の1石化と前壁の高さ、袖石が1石化していない状況等から築造時期は1・2号墳と少し間をおいた6世紀末～7世紀初頭頃と推定する。4号墳については残像状況が悪く部分的な法量のみしか判明していないが、3号墳に比べて玄室幅が小規模な点等から、3号墳の従属的な位置づけとし、やや後続する時期の築造と考える。

D支群の築造順序としては、6世紀代の1号墳(→2号墳)から7世紀代の3号墳(→4号墳)への変遷が想定でき、1号墳が古墳群全体の嚆矢として築造され、次段階の3号墳になるとI支群の大型古墳と共通する石室構造を採用し支群内の最上位の系譜を継承したものと考える。

I(岩戸)支群 D支群のさらに東方、古墳群の端に位置する最大規模の支群である。現時点で約40基の古墳が確認できているが、先述した通り酪農場の開発に伴い多くの石室が消滅したと伝わることから、実際はさらに大規模であったと考えられる。

当支群で法量や構造等の内容が判明している石室は合計11基を数える。これらの資料群は奥壁や玄門部の構造から大きく3段階に築造時期が分けられ、以下、その段階ごとに資料を紹介していく。

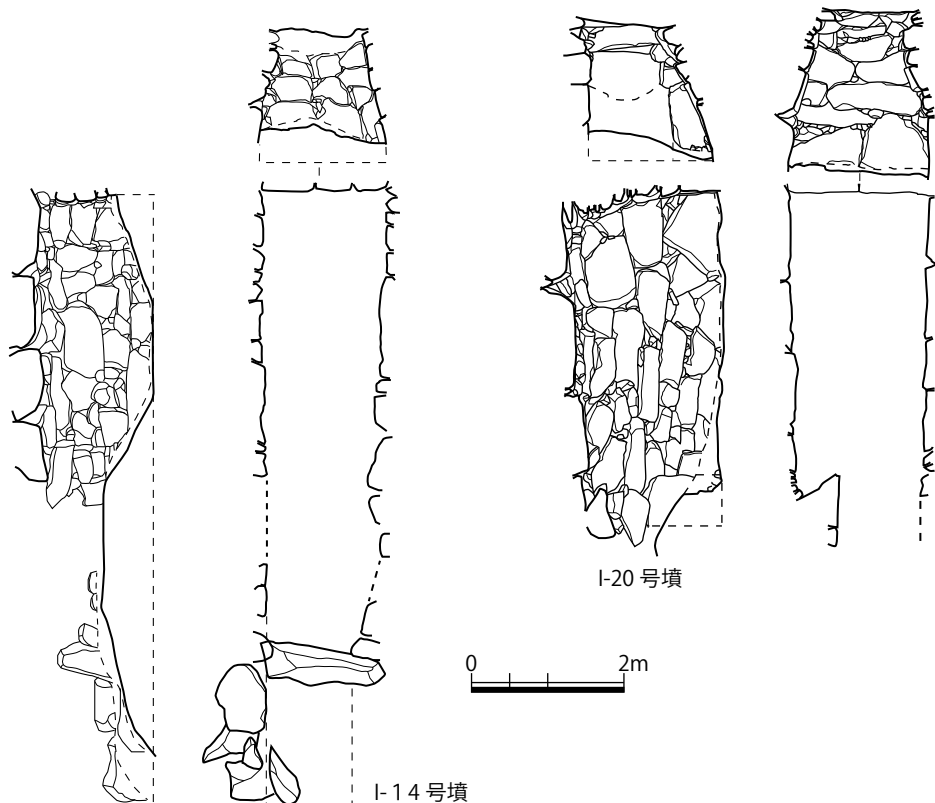


図3 上三草古墳群の横穴式石室② (S=100分の1)

第1段階の資料として支群内の東側に位置する14・18・20号墳があげられる(図3)。まず、20号墳を取り上げると残存長約4.7m、玄室長約3.85m、同幅約1.85mを測り、右片袖式の袖石にやや大ぶりの立柱石を採用しているものの、奥壁基底部が2石で構成されている点や壁面の持ち送りが基底部から続いている点等を評価して6世紀後半頃の築造と考える。玄室の構造から有袖A類に分類でき、畿内系石室の系譜を引くものと想定される。また、20号墳の周辺に所在する18号墳は、奥壁の段数が多く天井部の一部に隅消技法が観察できることから、20号墳とほぼ同時期の築造と考える。

それから、少し離れた位置に所在する14号墳は残存長約9.0mを測る大型無袖石室で、奥壁基底部に複数の石材を据えている点から、20号墳とほぼ同時期の築造と推定する。なお、20号墳に隣接する19号墳については、残存長約4.3mを測る無袖石室であり、次段階以降の築造と考える。

次に、第2段階の資料として、まず大型石室の1・2・34号墳を取り上げる(図4)。これらは、残存長約7.0m以上、玄室床面積約7.0㎡以上を測り、同時期の支群内で最大規模を誇る資料群である。その上で、先述したD-3号墳と同様に奥壁に鏡石を採用する構造を共有しており、同じ石室工人集団の手によって築造された可能性も想定でき、支群内における最上位層の系譜に位置づけられると評価できる。

では、これらの石室の築造順序について検討すると、最も玄室規模が大きいのは残存長約8.65m、玄室長約4.2m、同幅約2.2mを測る34号墳で、右片袖式で袖部に板状の立柱石と床面の梱石を採用している非常に特殊な事例である。袖部の板状立柱石については装飾的な意味合いが強いと想定し、一概に年代の指標にはなりづらいと判断している。そのため、奥壁や前壁の段数の多さや他の1・2号墳に比べて壁面の持ち送りや玄門部の構築技法の丁寧さを評価し最も早い築造と位置づける。

次に1号墳と2号墳についてみると、一般的な年代の指標である奥壁及び袖石の段数をみると2号→1号の順で減少しており、その点で2号墳の方が古い様相を示す。一方、1号墳については袖部上半にて玄室と羨道の段差(袖幅)が解消される構造が確認でき、構築上の丁寧さがやや欠ける点が見受けられるものの、立柱石や玄門の見上げ石に立派なものを採用し天井高も非常に高く構築されていることから、被葬者の階層的序列の高さが窺える。さらに、2号墳は1号墳に比べて側壁石材の大型化が進行しており、なおかつ奥壁の立ち上がりは垂直に近くなっており、新しい要素も多く見受けられる。両者は隣り合った位置に立地しており、より直接的な系譜関係を想定することが可能であるが、ここでは、袖部の構造よりもその他の特徴を評価して1号墳→2号墳という順序を想定したい。ただし、両資料にそれほど大きな時期差は認めがたく、当支群の最上位層の系譜として、まず34号墳が成立し、その影響を受けて1・2号墳がその系譜を継承するかたちで第2段階の後半頃に連続して築造されたと考える。

その他、同じ第2段階の資料としては4・23号墳があげられ、23号墳は開口部が崩れて内部の詳細は不明であるが奥壁が大型石材3枚(基底石1枚)で構成され、同時期の一般的な畿内系石室の構造と共通する。ただし、先の大型石室3基に比べると鏡石の不採用や玄室規模がやや小型化して

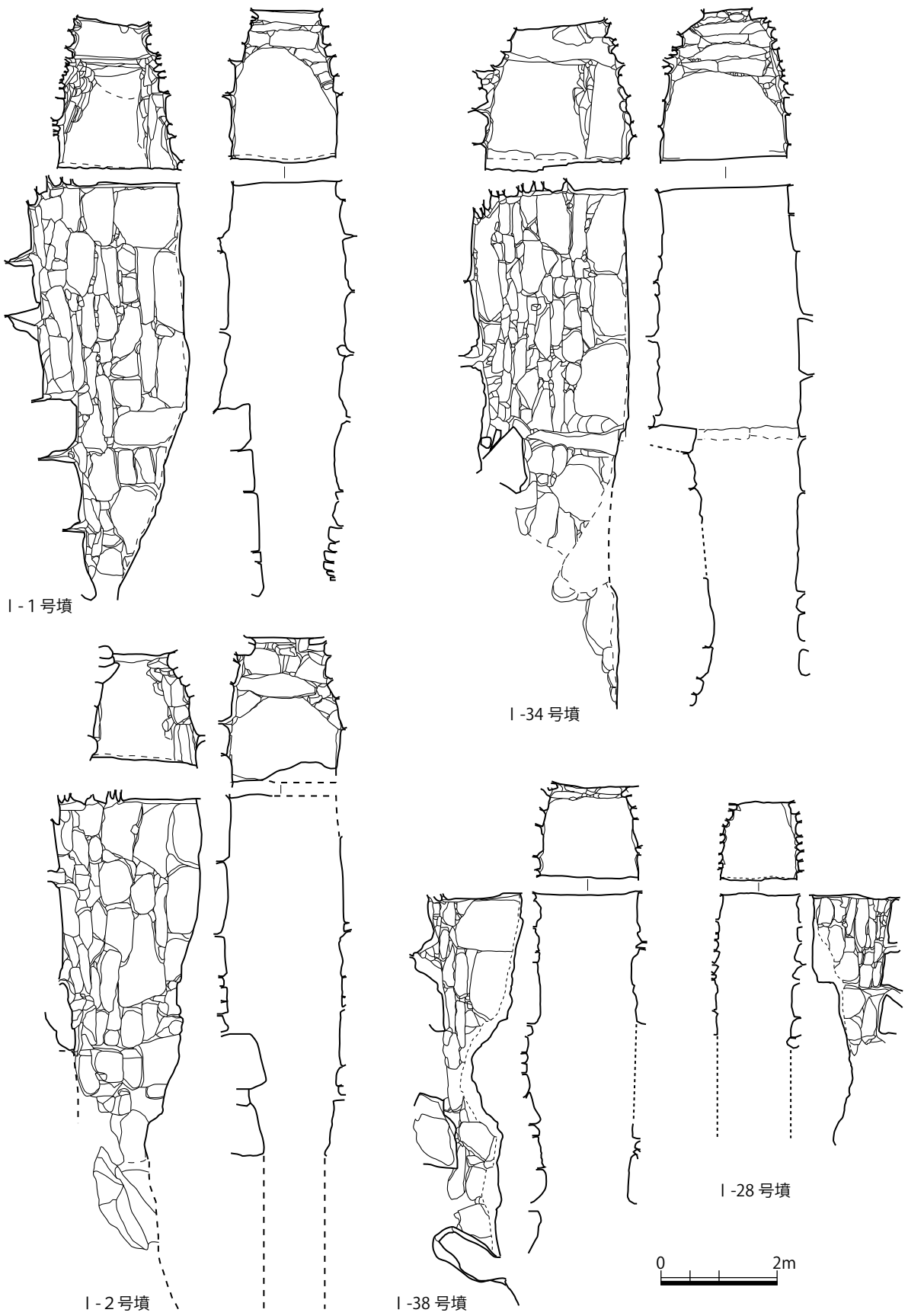


図4 上三草古墳群の横穴式石室③ (S=100分の1)

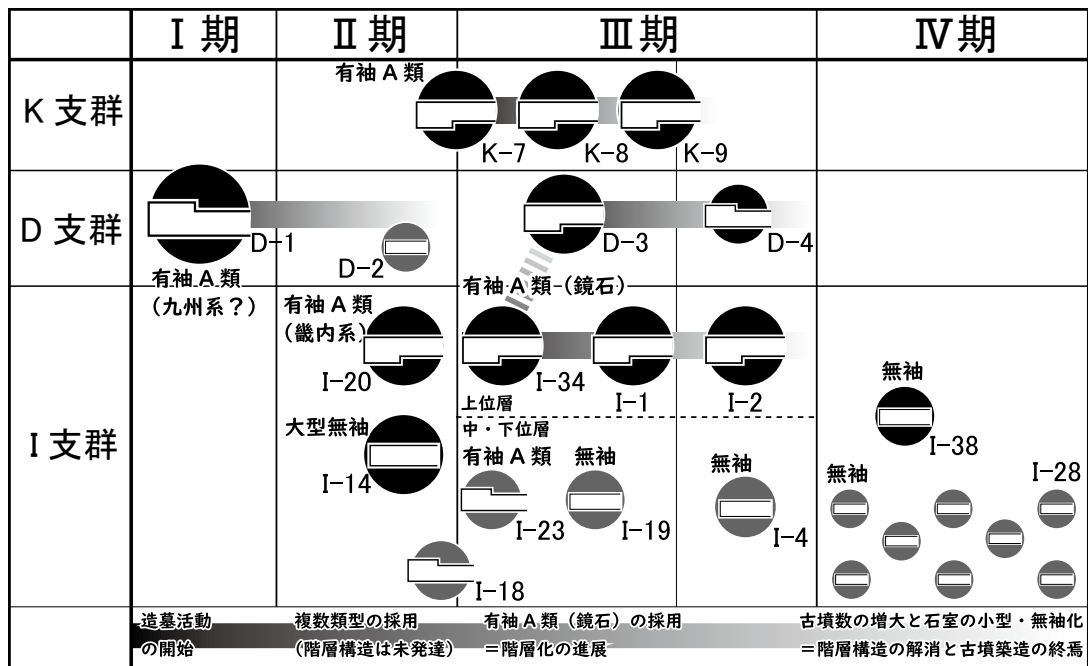


図5 上三草古墳群における横穴式石室の変遷

いる点から、相対的により下位の階層として位置づけたい。また、4号墳については残存長約6.6m、玄室幅約1.1mを測る無袖石室で奥壁を大型石材2段で構成している点から、23号墳に後続する時期の築造と推定する。

最後に、第3段階の資料として28・38号墳を取り上げる。これらはそれぞれ残存長約4.25mと6.7mを測る無袖式の石室であり、奥壁天井部に若干の石積みが見られる38号墳を古く位置づけ、石室規模の最小化と奥壁の1石化を達成した28号墳を本古墳群の最終末期の資料として位置づけたい。築造時期については概ね7世紀中葉以降と考える。この2古墳の周辺には小規模墳が密集して立地しており、当該時期に築造数が飛躍的に増加したことが想定される。

(3) 小結

以上、古墳群内に残された良好な石室資料について紹介してきたが、ここで、古墳群全体の資料の変遷をI～IV期に分けてまとめておきたい(図5)。

まずD-1号墳の築造を嚆矢として古墳群全体の造墓が開始される(I期)。次のII期になると、I支群でも造墓が開始されI-20号(有袖A類)やI-14号墳等(大型無袖)が築造され、大型石室に複数の類型が採用されるが、現状では同時期の古墳数は少なく石室の階層化はあまり進んでいないものと判断できる。それがIII期に入ると、I-34号墳の築造を契機として古墳群内の大型石室の系譜に鏡石を用いた構造が齊一的に採用されるようになる。同時期の小規模石室であるI-23号(有袖A類(畿内系))及びI-4号墳(無袖)にはそうした構造が認められないことから、古墳群内の上位階層にのみ排他的に採用することで差別化・序列化が図られ、階層構造がより発達したと評価できる。そして最終段階のIV期になると、古墳の築造数がさらに増大したと推定され、それに伴い石室の小型化・無袖化が進み、III期に発達した階層構造が解消され、最終的に28号墳等の築造をもって

古墳群の造墓は終了する。

以上のような変遷過程を導き出せたが、次章では、これまでの検討によって抽出した大型石室採用の石室類型がどのような系譜を辿って上三草古墳群にもたらされたのかその起源について検討し、その要因となる当時の被葬者集団の交流関係について考察を行いたい。

3. 石室類型の系譜について

(1) D-1号墳

古墳群の造墓開始の契機となるD-1号墳は、小型の板状石材を持ち送りながら積み上げつつ天井部に隅消し技法を採用している点等から、加古川中流域における導入期石室の一例であると評価できる。一方で、玄室平面プランの法量が同時期の事例に比べて非常に大規模であり、旧加東郡内において同様の事例は見出しがたい。さらに、特徴的な点として奥壁基底部に約2段分の高さを持つ横長の大型板状石材の採用があげられ、これについては、同じ旧賀毛郡域の最初期の石室資料として位置づけられる加西市剣坂古墳に類例を見出せる。剣坂古墳は出土遺物から6世紀初頭の築造と推定

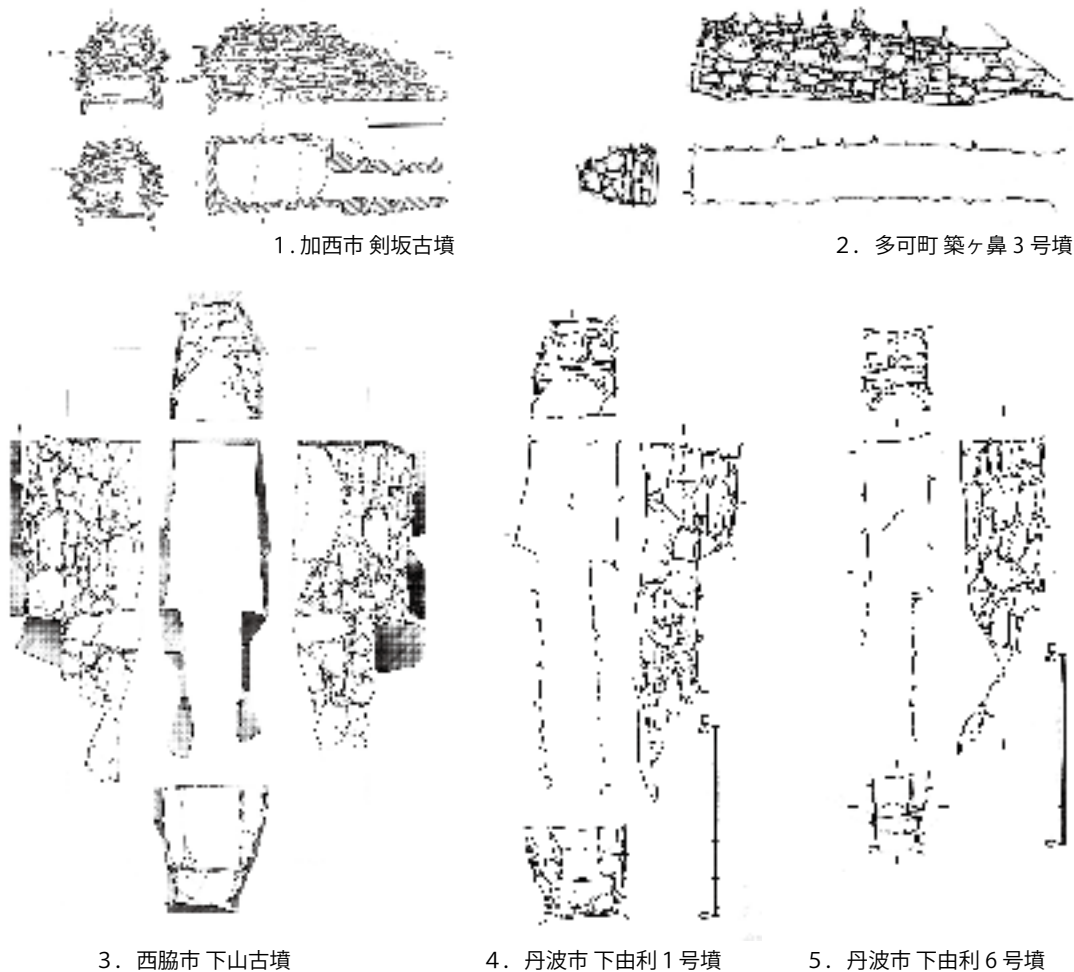


図6 各石室類型の類例 (S=200分の1)

され、奥壁及び側壁の基底部に大型の板状石材を使用する点等から、九州系石室の系譜を持つ事例として評価されている（図6-1）。その剣坂古墳と比較すると、D-1号墳は基底石材が若干小ぶりである点や持ち送りが緩くなっている点等が後出的な要素として捉えられ、一部九州系石室の影響を受けて剣坂古墳に後続する形で成立した可能性を提示したい。

（2）大型無袖石室

本古墳群の大型無袖石室は現時点でD-14号墳が唯一該当する。奥壁基底部を複数石材で構成することからⅡ期の築造と推定し、旧賀毛郡域における同類型の分布の中でも最初期に位置づけられる（藤原2017）。築造年代の近い類例としては、旧託賀郡域の多可町築ヶ鼻3号墳（図6-2）・奥豊部1号墳があげられ、播磨南部地域における同類型の分布はかなり少数であることから、但馬地域など日本海側との交流関係の中で情報がもたらされ採用にいたったものとする。

（3）有袖A類石室（鏡石）

当該地域における有袖A類の系譜については、基本的に畿内系石室の系譜として加古川下流域からの影響を受けて成立した類型であると前稿において位置づけた（藤原2023）。本古墳群においては、造墓開始当初より最上位層の石室に連綿とこの類型が採用されているが、特にⅢ期段階において奥壁基底部に鏡石を設置する構造が共有される。この鏡石については、周辺の西脇市下山古墳（図6-5）や三木市正法寺1号墳等でも確認できることから、比較的同時期の大型石室において、古墳群単位を越えた加古川中・上流域の上位層に採用された構造であることがわかる。

その上で、近年、加古川の最上流域に位置する丹波市域（丹波国氷上郡）において、6世紀後半頃から鏡石を採用する石室が多数存在することが仲田周平氏によって報告されている（仲田2023）。さらに、仲田氏は同じエリアの6世紀後半頃の中・小規模の片袖式石室に袖部基底石への板状石材の採用が多く認められるという見解を下由利古墳群等の石室を例示して述べている（図6-4・5）。そうした資料群と比較すると、I-34号墳の石室は、下由利1号墳の奥壁や同6号墳の袖部と形態的に近く、下由利古墳群は加古川上流域沿岸の丘陵地に位置し播磨との境界にほど近い場所に位置することから、本類型の起源として加古川を遡った丹波地域との人々との交流によって情報が伝播した可能性を提示したい⁽⁶⁾。

4. おわりに

以上、上三草古墳群の石室について、その内容を紹介するとともに、若干の分析と考察を行ってきた。検討の結果として、石室の変遷と時期毎の石室タイプの採用状況をみたときに、石室の階層構造が未発達な状態で複数類型を大型石室に混在して採用する時期から、階層性が進展し特定の類型を大型石室に排他的に採用した上で中・小型の石室には複数類型の採用が認められる構造へと変化し、最終的には古墳数の増大に伴って、石室の小型・無袖化によって階層性が解消されるとともに古墳の築造自体も終焉に向かうという流れを位置づけることができた。この結果は、本稿冒頭で述べた播磨北部地域全体を通してみた石室の変遷過程と概ね合致しており、筆者がこれまで展開してきた議論を肯定

的に補強するものとなった。

その上で、7世紀代に新たに採用される有袖A類（鏡石）については、おそらく河川上流域の丹波地域との交流によってもたらされた可能性が高いことを指摘できた点は新たな成果であり、播磨北部地域の多様な地域間関係がまた一つ炙り出せたのではないかと考える。

なお、今回は紙幅の都合上、全ての石室資料を紹介することができなかった⁽⁷⁾。また、埋葬施設の内容は不明であるが、上位層の墳墓となりうる大規模な墳丘もいくつか存在している。願わくば、上三草古墳群に関する調査が今後さらに進展することを期待するとともに、本稿がその先鞭として活用の一助となることを祈念して筆を擱きたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、有限会社三草酪農場様には敷地内に所在する古墳の調査に際して多大なる御高配を賜った。末筆ではあるが記して謝意を申し上げる。

註

- (1) 播磨地域における石室研究は非常に膨大であるが、ここでは紙幅の都合上、それらを逐一紹介することは叶わないため、本稿の分析に関係するもの以外の研究文献の掲載を大幅に割愛した。それらの詳細についてはお手数ではあるが藤原 2023 にて詳述しているのでそちらをご参照いただきたい。
- (2) 筆者は播磨北部地域の石室の検討から、有袖式については玄室幅指数（玄室長／奥壁幅）が2.8以下のものをA類、それ以上のものをB類とし、無袖式石室については全長7.0mを測るものを大型無袖石室と定義している。
- (3) 加東市内において同時期の集落遺跡を探すと加古川沿いの家原・堂ノ元遺跡や千鳥川沿いの木梨・西ノ原遺跡といったやや距離の離れた平野部にしか存在していないことから、上三草古墳群は状況的にみて被葬者が居住する集落から離れた山間部に墓域を形成する、いわゆる「山の古墳群」としての位置づけが可能であると考え（菱田 2013）。
- (4) 当時の情報については、黒田俣正氏作成の『兵庫県遺跡台帳作製調査日誌 昭和37年度』（加東市教育委員会所蔵）を参照した。
- (5) 中濱・丹羽両氏の調査時の古墳名と本稿での呼称との対応については、上三草22号墳＝D-1号墳、同24号墳＝D-3号墳、同64号墳＝I-34号墳、同85号墳＝I-2号墳、同86号墳＝I-1号墳、同91号墳＝I-20号墳、になると推定する。中濱氏は64号墳をTK209型式期の築造とする一方、丹羽氏は22号墳及び64号墳をTK43型式期の築造と一段階古く位置づけている。
- (6) 袖部に板状立柱石を据える用石法については、丹波市とは反対の加古川下流域の平荘湖古墳群とその周辺の群集墳についても比較的多く採用事例が見受けられ、それ単体の系譜としてはこちらが候補となる可能性も考えられる。ただし、その地域では奥壁に鏡石を採用する事例が現状少ないことから、2つの構造のセット関係を重視して丹波地域からの影響を想定した。

なお、時期は遡るが、本古墳群の隣接地区では弥生終末期～庄内式期の近畿北部系土器が大量に出土

する下三草・川ノ上遺跡があり、当該エリアへの日本海側からの集団移住をも想定できる様相が認められる（藤原 2020）。このことも河川上流域との交流が活発であった傍証として提示しておきたい。

- (7) 本稿では触れられなかったが、上三草古墳群の南方の山塊上に存在する大規模群集墳である鹿野古墳群においても、今回取り上げた鏡石を採用する有袖 A 類石室が大型古墳に一定数認められる。このことは両古墳群の被葬者の交流関係を示唆するものと考えられ、また機会を改めて詳細に論じてみたい。

引用・参考文献

- 加東郡教育委員会 1993 「上三草古墳群 7・8・9 号墳」『埋蔵文化財調査年報 1990 年度』加東郡埋蔵文化財報告 14
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2016 「神河町城山古墳群の測量調査」『京都府立大学文学部歴史学科 フィールド調査集報』第 2 号
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2017 「兵庫県神河町所在古墳群の測量調査」『京都府立大学文学部文化遺産学コース フィールド集報』第 3 号
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2018 「兵庫県神崎郡市川町山王 1 号墳測量調査」『京都府立大学文学部文化遺産学コース フィールド集報』第 4 号
- 小中美幸 1999 「東山古墳群の横穴式石室について」『東山古墳群 I』
- 高松雅文・榎 真麻 2007 「播磨の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 仲田周平 2023 「丹波氷上郡における横穴式石室の様相」『ひょうご考古』第 19 号 兵庫考古学研究会
- 中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 1999・2001 『東山古墳群 I・II』
- 中濱久喜 2002 「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』第 2 回播磨考古学研究集会の記録
- 丹羽恵二 2001 「多可町における大型無袖石室について」『東山古墳群 II』
- 丹羽恵二 2002 「託賀郡と賀毛郡域の古墳と編年」『横穴式石室からみた播磨』第 2 回播磨考古学研究集会の記録
- 播磨考古学研究集会 2001 『横穴式石室からみた播磨』第 2 回播磨考古学研究集会資料集
- 菱田哲郎 2013 「7 世紀における地域社会の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集
- 藤原光平 2017 「城山 1 号墳の位置づけについて」『京都府立大学文学部文化遺産学コース フィールド集報』第 3 号
- 藤原光平 2018 「山王 1 号墳の位置づけについて」『京都府立大学文学部文化遺産学コース フィールド集報』第 4 号
- 藤原光平 2019 「市川中流域における横穴式石室の変遷について—福崎町神谷古墳の調査報告を中心に—」『ひょうご考古』第 16 号
- 藤原光平 2020 「加古川流域における庄内式土器の様相」『土器からみた 3 世紀の播磨』第 20 回播磨考古学研究集会の記録
- 藤原光平 2023 「播磨北部における横穴式石室の地域性」『播磨学紀要』第 27 号、播磨学研究所
- 横穴式石室研究会 2007 『近畿の横穴式石室』

図表出典

図 1～5 及び表 1 は全て筆者が作成した。図 6 については、下由利 1・6 号墳は仲田 2023 より、築ヶ鼻 3 号墳は丹羽 2001 より、それ以外のものについては横穴式石室研究会 2007 より各石室図面を引用し作成した。